

吉田 静一

『フランス古典経済学研究』

— シモンド・ド・シモンディの経済学 —

有斐閣 1982.12 vii+293 ページ

本書は副題の示す通り、シモンド・ド・シモンディに関する個別研究である。主として恐慌論史の一環という特定の研究視角においてではあるが、すでに戦前からの長い研究史を持つわが国のシモンディ研究の中で、本書はようやく現れたほとんど初めての本格的な研究である。

「付篇」におけるベッシャの「シモンディ文書」の紹介や巻末の詳細な「文献目録」などの書誌学的研究にもその一端が窺われるように、内外の研究史を踏まえた本書のシモンディ論は、従来の諸研究を一面で制約していたいわばシモンディ解釈におけるレーニンの視角を自覚的に相対化したうえで、英仏古典派経済学の系譜と特質に関するマルクス命題を学史研究の有効な方法と看做す立場から、A. スミスの継承をめぐる理論情況の溶融と相剋を背景的地盤としつつ、リカードゥに対峙するシモンディという対抗的關係におけるシモンディ経済学の相貌を「歴史認識」と理論構造との両面から内在的に照射しようと試みたものである。

その際、フランスの「後進性」の自覚のうえに立つシモンディの時論的意識が豊かな「現実感覚」に捉えられた「イギリス経済」の現状認識に媒介されたものであり、このゆえにまたセイ＝リカードゥ流の「販路説」のアポリアがシモンディにとって克服さるべき理論的課題となりえたことを別括しつつ、本書はシモンディ経済学の特質を「歴史認識」に裏打ちされた「生産と消費の均衡」という原型的な基礎理念とこの理念に嚮導された「再生産と恐慌」の体系として把握することを通じて、シモンディを学史における正規の位置へと定着させようと努めている。この課題意識が本書を意欲的な作品にしているといつてよいだろう。

本書の編別構成は、「はしがき」、序章「シモンディ経済学序説」、第1章「歴史認識」、第2章「国家と経済——スミスとの関連において——」、第3章「生産と消費の均衡——リカードゥ批判——」、第4章「再生産と恐慌」、終章「三つの時代のシモンディ」となっており、「付篇」3篇、「文献目録」および「あとがき」(大島

雄一氏稿)が付されている。このうち「終章」は書き下ろしである。こうした本書の構成は、イギリス古典派の継承と批判に対応させてシモンディ経済学の特性を構造的に把握しようとする著者の姿勢を反映しているといえよう。

本書の著者吉田静一氏はこのような体系構成によってシモンディ経済学の体系的把握を試みたのであるが、本書を構成すべき「完成稿」を書肆に託したあと病魔に冒され、1982年4月13日、逝去された。51歳であった。本書におけるシモンディ論が「中間報告」であるという自己限定は、著者の学問的姿勢の一端と本書自体の補正的展開の予期とを讀者に窺わせるものがあるが、大島雄一氏の筆になる「あとがき」に見られるように、本書はやはり「遺稿」と呼ばれねばならない。

本書に一貫する分析視角を挙げてみれば、それは、『フランス重商主義論』(未来社、1962年)以来の著者の方法意識たる歴史と理論の相互補完性ともいべきモチーフであろう。本書におけるシモンディの学史的考察を直接に規定する方法的意味を担っている「終章」での「遡行的方法」という方法が、それを示している。更に、本書の主要な分析対象たる『経済学新原理』の課題は、「市場の梗塞」という事実的過程を理論的に説明しえぬセイ＝リカードゥの「販路説」の批判的超克を現実的契機として設定されたものであること、シモンディの恐慌論の「理論的卓越さ」は「信用恐慌」の契機をも「理論化」したこと、総じてシモンディの「再生産と恐慌」に関する理論的構想は1825年恐慌を中軸としたこの前後の「イギリス経済」の適確な現状分析に支えられていたこと——これら経済史学的分析を通じてシモンディ像を明確化するといった努力も、「歴史型に近い」本書の方法的特質のひとつであろう。

このような視角はもとより、リカードゥとシモンディを同時代的対抗の理論的地平において論究すべきことを要請するもののはずであるが、スミスを継承し、「経済学の危機」をのり越え得るシモンディの問題構制における可能性の条件に関しては窮極のところ、原始的蓄積の達成程度の「段階」的差異つまりは「フランスの後進性」の〈優位〉に求められている。しかも当代における「富の蓄積と貧困の蓄積」とを識別する準拠枠は、「所有と労働との結合した体制」=「自立した小生産」における「生産と消費」の直接的「均衡」という「歴史を貫通する」原型的理念(→「愉楽と休息のための労働」を「生活原理」とする「孤立人」の「観念」)であって、この視角が「生産諸形態の歴史的継起」論を規定し、そこ

にシスモンディの「歴史認識」の独自性があるとされている。シスモンディに「近代の社会組織」を「階級分裂」として把握させたのも、このような「均衡」の観念に起因する。著者がレーニンの規定を逆手にとって、シスモンディのあの「ロマン主義」こそが「資本主義批判」を可能にさせたと言語するのである。ただし、「資本主義批判」といっても、シスモンディにおいては否定を意味するのではない。著者によれば、シスモンディは「資本主義社会を孤立人とは異質の歴史的な社会として認識しつつ、しかもなおそこに孤立人の観念が超歴史的に貫徹しなければならぬ社会として、二重に把握した」のであって、このような二重性の論理に読者の留意が求められている。

「シスモンディ経済学の基軸」をなすのは経済的諸契機の相互連関を媒介する「所得」であり、「所得→消費→生産の規定関係」論、要するに「所得論」が顕揚される。「市場の梗塞」という事実的過程をセイ＝リカードの「販路説」が説明しえぬのは、「生産が需要ヲ生ム」という論理を前提するからであるが、著者はそうした「販路説」に対するシスモンディの批判(反批判)の要点を、資本と労働の自由な移動の「困難」ないし「不可能」という論点として検出するとともに、結局のところ、「所得不足による生産過剰」という点にシスモンディの「販路説」批判の方向があるとして、「実現と再生産」の可能性の問題が(1)「タイム・ラグ論的視角」と(2)「競争論的視角」とにおいて捉えられていることを指摘する。

こうして、シスモンディによる「販路説」批判の積極的論点は「再生産と恐慌」の理論としての位置づけが与えられる。「均衡的發展の条件」がいわゆる「円環運動」(un mouvement circulaire)ないし「所得→消費→生産の規定関係」論によって説明され、生産と消費の均衡の下での資本蓄積の可能性が明らかにされる。著者はこのシスモンディの「規定関係」論を「古典派経済学を超える」論理として高く評価する。「均衡破壊の条件」⇒恐慌については、タイム・ラグ論、資本(就中「固定資本」)と労働の移動の困難論、競争論などによって詳細に分析され、またシスモンディが「信用恐慌」の契機を理論的に重視したことにも留意されている。

ただし、本書の理論的分析の背後にはマルクス『資本論』の構成が想定されているようにも読み取り得るのであるが、これは「結局はマルクスに戻ってこざるをえない」という著者の理論的・学史的立場によるものであろう。

スミス→リカード→マルクスという学史のいわば正

系は認めつつ、同時に著者は、スミス→シスモンディ→マルクスの線をそれと「同じ太い線」で描こうとする。後者に関しては、「労働力の再生産」が「非資本主義」的制度たる「国家」による労働力の「育成」・「質の向上」といった「制度的」媒介によって保証されるという意味での「資本主義生産に内在的な国家機能」論が、「歴史段階」の相違を措くとすれば、構造的には同一の、三者に「共通の認識」であると著者はいう。この論点は直接には、シスモンディにおける調停者としての「保護的権力」の要請がスミスの「国家」機能論にリンクされ、更にはマルクスの「経済学批判体系」(いわゆるプラン後半体系)の構想へと流れ込む系譜として提出されたものである。著者は恐らく、リカードを経由の「線」を価値論を含む「資本一般」の次元で、シスモンディ經由のそれを「国家」や法、信用制度の契機をも含む「競争論の次元」でそれぞれ考えているものと予料される。もしそうであれば、これはやや機械的に過ぎるのではないだろうか。

それは、本書が、『経済学研究』において積極的な展開が見られるシスモンディの価値論についての主眼的な分析を欠いていることとあなたがち無関係ではないように思われる。「生産と消費」の「直接性」が保証されている「小生産」的關係に対して、「生産と消費」の〈間接性〉をもって特質とする社会こそ、「商業」・「市場」に媒介されねばならず、従ってそこでの「価値」が「社会的・抽象的観念」に関連するという規定は、当の『経済学研究』におけるシスモンディの発想なのである。

いずれにせよ、『経済学研究』に関する主眼的な分析を欠いていることは惜しまれてよい。しかしそれは、詮ずべき筋合いのものではない。

本書のシスモンディ論によって、わが国のシスモンディ(→マルクス)研究の水準とスケールは格段、豊かになったといってよいであろう。本書から、以後のシスモンディ研究は始まるというべきである。

場違いを懼れつつ、著者の警咳に接し得た若輩の評者においても、故吉田静一氏の御冥福を祈らずにはいられない。

〔太田一廣〕